



〔海の状況 (6/16~7/15) 〕

- ・小川地先の表面水温… 期間を通して神子平年よりかなり低め (平年差-1.5℃~-1.0℃) から神子平年よりかなり高め (平年差1.0℃~1.5℃) で推移した。(図1)
※神子平年は、1988年~2017年の神子地先の平均値
- ・米ノ地先の表面水温… 期間を通して平年よりはなはだ低め (平年差-1.5℃~) から平年並み (平年差±0.5℃) で推移した。(図2)

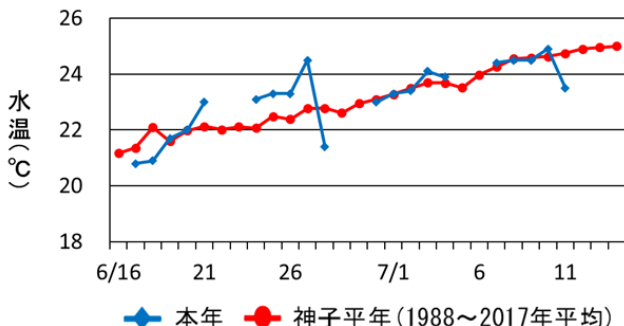


図1 若狭町小川地先における表面水温の推移

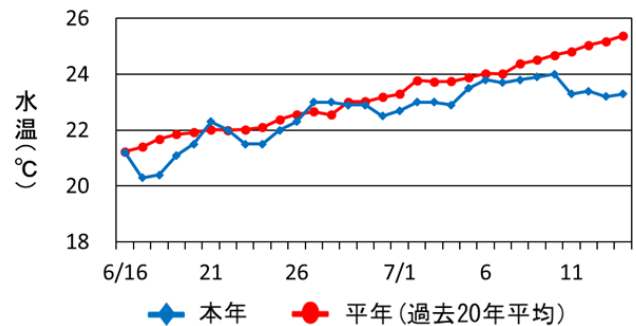


図2 越前町米ノ地先における表面水温の推移

〔若狭湾および周辺海域の海況：6月〕

6月の若狭湾およびその周辺海域の水温分布は、表層(0 m)では、福井県沿岸で18℃~22℃と前年同様であった。水深50 mでは、若狭湾東部で16℃~18℃と前年同様、若狭湾西部で18℃~20℃と前年より水温が高くなっていた。水深100 mでは、若狭湾で16℃~18℃と前年同様であった。水深200 mでは、若狭湾沖において2℃~4℃と前年より水温が低くなっていた。(図3)

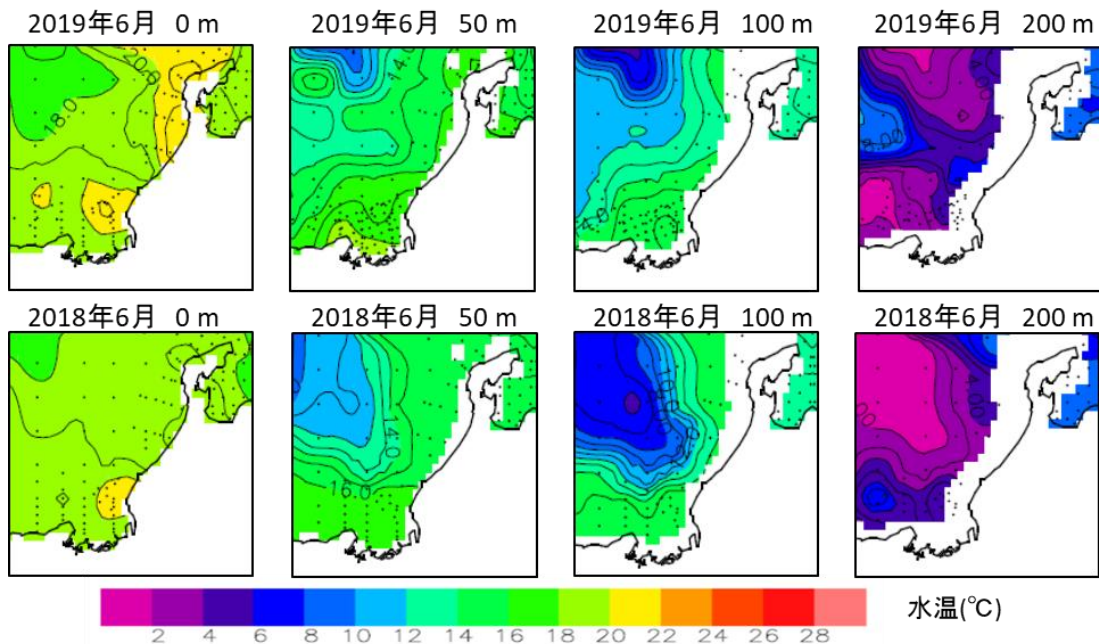


図3 若狭湾およびその周辺海域の水温分布図 (日本海区水産研究所の日本海漁場海況速報より抜粋)

スルメイカの漁模様

今年の6月下旬頃から福井県沖でスルメイカの漁場が形成され、県外からも多くのイカ釣り船が操業していました。6月のイカ釣漁による漁獲量は246 tと前年(38 t, 対前年比:647%)、および平年(143 t, 2010-2018年の10年平均)を大きく上回っており、今年6月のスルメイカ漁は近年にない豊漁だったといえます。

なお今後のスルメイカ漁の見通しについては本誌3ページをご覧くださいとともに、より詳細については日本海区水産研究所ホームページ (<http://jsnfri.fra.affrc.go.jp/index.html>) から閲覧できます。

(漁場環境グループ 長島 拓也)

〔県内の漁模様：6月〕

2019年6月の県内の総漁獲量は1,249 tで、昨年同月と比べて238 t上回った。

〔定置網〕

漁獲量は854 tで、昨年同月並みであった。サワラ、トビウオ、ワラサ等は下回ったが、ブリ・ツバス、ヒラマサ等は上回った。

〔底びき網〕

漁獲量は63 tで、昨年同月を9 t上回った。その他エビは下回ったが、ニギス、キダイ、アカガレイ等は上回った。

〔釣り・その他〕

漁獲量は335 tで、昨年同月と比べて195 t上回った。アナゴ等は下回ったが、スルメイカは大きく上回った。

表. 主要魚種の漁法別漁獲量(6月)

定置網 (kg)						底びき網の続き (kg)					
魚種名	2019年	2018年	平年	前年差	平年差	魚種名	2019年	2018年	平年	前年差	平年差
マイワシ	3,939	2,710	537	1,230	3,402	アカガレイ	4,099	3,277	5,696	822	-1,597
カタクチイワシ	3,390	7,963	8,304	-4,574	-4,914	その他カレイ	811	778	1,395	33	-583
アジ類	100,723	88,245	209,640	12,479	-108,916	ハタハタ	570	50	615	520	-45
サバ類	6,504	27,718	46,767	-21,213	-40,262	ニギス	2,823	1,627	682	1,196	2,141
マグロ類	6,328	390	5,059	5,938	1,269	タコ類	442	260	523	182	-81
カツオ類	1,552	2,763	2,047	-1,211	-496	アカエビ	40,575	40,408	41,718	167	-1,143
ブリ銘柄計	442,082	202,760	286,649	239,322	155,432	その他エビ	1,834	2,036	3,839	-202	-2,005
(ブリ)	293,743	78,722	60,757	215,021	232,986	その他	7,423	2,585	3,282	4,838	4,141
(ワラサ)	23,918	80,667	20,078	-56,749	3,839	合計	62,864	53,677	59,570	9,187	3,294
(ハマチ)	9,683	10,628	54,914	-945	-45,231	釣り、延縄、さし網、その他の漁法 (kg)					
(ツバス)	114,681	32,666	150,856	82,016	-36,175	魚種名	2019年	2018年	平年	前年差	平年差
(アオコ)	56	78	43	-22	13	(ブリ)	87	341	459	-254	-372
ヒラマサ	36,486	7,946	2,403	28,540	34,083	マダイ	1,777	2,234	2,609	-457	-832
サワラ	116,073	265,113	144,698	-149,040	-28,626	キダイ	6,992	5,415	6,332	1,577	660
トビウオ	70,317	161,312	154,531	-90,995	-84,215	アマダイ	3,752	3,330	4,215	422	-463
マダイ	7,741	10,672	9,777	-2,931	-2,036	スズキ	2,525	1,857	4,778	668	-2,254
スズキ	10,441	8,173	9,156	2,267	1,285	ヒラメ	488	393	1,839	95	-1,351
カマス	5,954	3,343	6,698	2,611	-744	アナゴ	1,218	3,049	3,067	-1,832	-1,849
フグ類	1,953	6,308	7,696	-4,356	-5,744	メバル類	2,746	2,267	4,149	479	-1,403
スルメイカ	171	3,397	10,510	-3,226	-10,339	スルメイカ	245,794	38,427	142,895	207,367	102,900
その他イカ	2,940	4,273	2,423	-1,333	517	ケンサキイカ	763	1,605	2,142	-842	-1,380
その他	36,198	23,865	31,260	12,333	4,938	タコ類	29,394	26,796	36,738	2,598	-7,344
合計	853,614	827,675	939,374	25,939	-85,760	その他	39,850	55,094	85,029	-15,243	-45,178
底びき網 (kg)						合計	335,385	140,807	294,250	194,578	41,135
魚種名	2019年	2018年	平年	前年差	平年差	全漁法 (kg)					
マダイ	782	278	519	504	263	魚種名	2019年	2018年	平年	前年差	平年差
キダイ	3,393	2,321	1,257	1,072	2,136	合計	1,249,211	1,010,875	1,288,222	238,337	-39,011
ヒラメ	112	57	45	55	67						

※1 平年の値は2009-2018年の10年平均です。 ※2 ()は銘柄、その他カレイはアカガレイ以外のカレイ類、その他エビはアカエビ以外のエビ類です。

※3 ニギスの平年値は2015-2018年の4年平均です ※4 数値は小数点以下を四捨五入しています。

〔近隣府県の漁模様〕

(漁獲状況…石川県：6月の定置網1日あたりの漁獲量。京都府：6月にJF京都漁連舞鶴地方卸売市場へ水揚げされた定置網1日あたりの漁獲量。兵庫県：6月の余部定置網1日あたりの漁獲量。鳥取県：6月中旬～7月上旬のまき網1統あたりの漁獲量。)

石川県…定置網…ブリ 7.2 t、マアジ 5.6 t、サワラ類 3.9 t、スルメイカ 3.8 t、フクラギ・コブクラ 3.0 t、
京都府…定置網…サワラ類 6.6 t、マアジ 3.7 t、ヒラマサ 3.5 t、ツバス 1.6 t、カタクチイワシ 1.3 t、ブリ 0.4 t
兵庫県…定置網…ヒラマサ 111 kg、シロイカ 107 kg、アジ 101 kg、ツバス 32 kg、スズキ 32 kg、サワラ 18 kg
鳥取県…まき網…マアジ 8.6 t、ウルメイワシ 4.6 t、カタクチイワシ 1.9 t、マイワシ 0.5 t、ブリ類 0.3 t、マサバ 0.3 t

(漁場環境グループ 長島 拓也)

2019年度スルメイカ漁場一斉調査結果

日本海側の各試験研究機関によるスルメイカ漁場一斉調査が、6月下旬から7月中旬にかけて行われましたので、その結果についてお知らせします。

(1) 福井県の調査結果(表1)

福井県沖合の4定点(図1)において、釣機6台を用いて每晚20時~4時の8時間釣獲試験を行いました。

- 漁場水温・釣獲海域の表面水温は21.0~21.8℃(2018年:20.0~24.4℃)、50m深水温は9.7~17.0℃(同:11.6~17.4℃)でした。
- 釣獲結果・総釣獲匹数は、2,738匹(2018年:1,317匹)、CPUE(釣り機1台1時間あたりの釣獲匹数)は0.03~30.4匹、平均14.9匹でした。
- 体長組成・釣獲されたイカの外套背長(胴の長さ)は、7月1日操業においては13~14cm、7月2日操業においては15~16cm、7月3日操業においては14~15cm、7月4日操業においては19~20cmが主体でした。

表1 調査点およびスルメイカ釣獲調査結果

月日	7月1日	7月2日	7月3日	7月4日
調査位置	N36° 39' E135° 00'	N37° 59' E135° 00'	N37° 31' E135° 37'	N37° 00' E135° 40'
釣獲匹数	1	1,334	20	1,383
CPUE	0.03	30.38	0.42	28.81
平均外套背長 (cm)	13.5	15.2	15.3	19.34
表面水温 (°C)	21.1	21.8	21	21.5
50m深水温 (°C)	17	10.7	9.7	9.8
標識放流匹数 (匹)	0	463	0	704
標識番号 (黄色アンカー型タグ)		JPN 106, 107, 116, 119, 133		JPN 102, 111, 114, 117, 135, 136, 137, 150, 151, 159

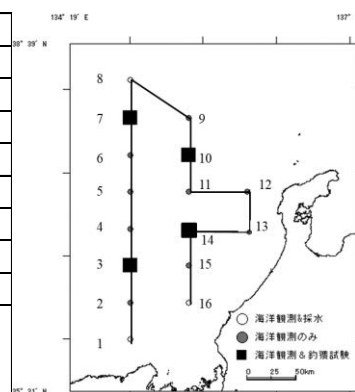


図1 スルメイカ釣獲調査点

(2) 日本海全体の状況(図2)

日本海区水産研究所の取りまとめによると、全調査定点におけるCPUEの平均は7.4匹で、前年(10.16匹)を下回り、近年平均(15.31匹)の約48%でした。道北~道央海域では、外套背長14cm台~16cm台の個体を中心に採集され、CPUEは37匹が最大でした。

本州西部日本海では、16cm台~17cm台の個体を中心に、より小型の12cm~13cmまで幅広いサイズの個体が採集され、CPUEは若狭湾沖の61匹が最大でした。

沖合域では、大和堆周辺海域におけるCPUEは、他の海域より比較的高い傾向がみられましたが、最大で30匹であったほかは10匹を下回り、漁獲がない調査定点もありました。

今後の見通しとして、西部日本海では、来遊量は前年および近年平均(過去5年平均)を下回っており、沖合からの南下群による好漁場は形成されにくいと予想されます。

沖合域の来遊量も、前年および近年平均を下回ると予想されます。主漁場は、北海道西沖で8月~11月、大和堆周辺海域で11月~12月に形成されると予想されます。

本県の調査点では、合計1,167匹のスルメイカの標識放流を行いました。標識の付いたスルメイカを採捕されましたら、水産試験場までご連絡をお願いいたします。(漁場環境グループ 長島 拓也)

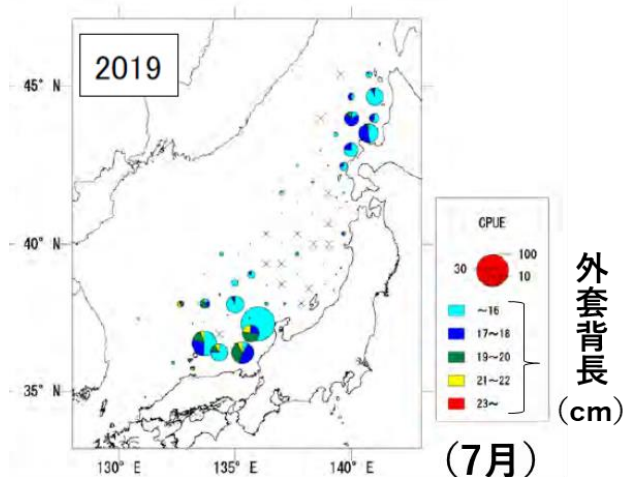


図2 日本海におけるスルメイカ分布(悪天候による欠測有)

マハタのハダムシにご注意ください！！

福井県水産試験場では、新しい養殖魚開発として、暖海性の高級魚であるマハタの種苗生産と養殖に関する研究に取り組んでいます。今年度からは、いよいよ種苗生産が本格的に始まり、来年には福井県産のマハタ種苗が県内に出荷され、養殖されるようになります。

さて、近年、春先にマハタが衰弱・へい死する事例が散見されるようになり、その原因がハダムシの大量寄生であることがわかりました。ハダムシは、読んで字の如く、魚の体表に付く寄生虫で、吸盤状の固着器を使って魚の体表に吸着し、粘液や体表組織を食害します(図1)。ハダムシが大量に寄生することで魚はストレスを感じ、生簀網に体を擦り付けるようになります。ひどい場合は、体表に傷ができ、そこから病原菌に感染してしまいます(図2)。マハタには、周年寄生型の *Benedenia epinepheli* (和名：マハタハダムシ) と、夏場に出現する *Neobenedeniagirellae* (和名：シンハダムシ) という2種類のハダムシが寄生します。

養殖魚のハダムシ対策としては、ハダムシが淡水に弱いことを利用した、淡水浴が一般的です。マハタの場合は、純淡水では魚体への負担が大きいため、1/6 海水を用いた低塩分水浴を行います。マハタ養殖ではハダムシは年間を通して見られますが、寄生数が多い季節、少ない季節、ハダムシ対策の適切な時期および頻度等についてはよくわかっていません。そこで、今年度から、マハタに寄生するハダムシの寄生数増減の実態調査を始めた。

養殖魚では、ハダムシの寄生に関してはごく自然な現象であり、少数が寄生している程度ではマハタが衰弱するようなことはありません。しかしながら、衰弱に至らなくても、ハダムシの寄生はマハタの健康面に影響を及ぼしている可能性が指摘されています。現在、水産試験場では定期的な低塩分水によるハダムシ駆除の有無によってマハタの成長や生残に対する効果を調査しています。

マハタに限らず、養殖魚のハダムシ症は、毎年ほぼ必ず発生するうえ、駆除には多大な時間と労力がかかる厄介な病気です。今後、マハタの養殖量が増えれば、ハダムシ症対策は必ず必要になります。上記の調査により、ハダムシ駆除の適切なタイミングや頻度を明らかにし、養殖業者の方の負担軽減につなげていきたいと考えています。

水産試験場では、魚病に関するご相談や、病魚の持ち込みを随時受け付けています。魚病の発生が疑われる時は、是非ご連絡ください。

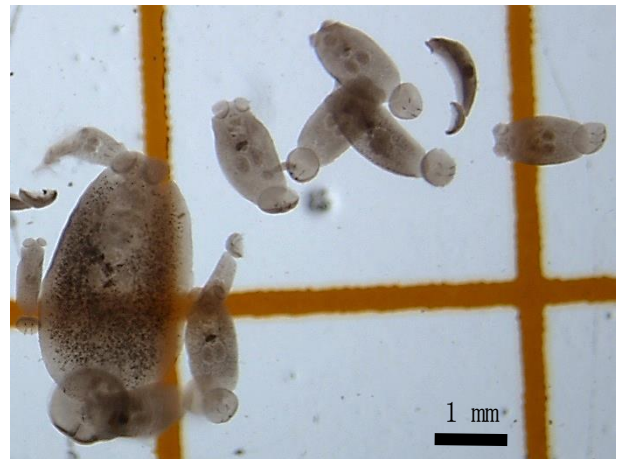


図1 マハタに寄生していたハダムシ



図2 ハダムシ症の重篤魚